トマス・テイラーにおけるプロティノス受容に関して

----- Enn. I, 6, [1] において----

宅

月

ルペウス教、ピュタゴラスからの思想の流れを汲んだ哲学を語ったマス、Plotinos, 二〇五~二七〇)である。プロティノスはオティノス(Plotinos, 二〇五~二七〇)である。プロティノスはオティノス(Plotinos, 二〇五~二七〇)である。プロティノスはオティノス(Plotinos, 二〇五~二七〇)である。プロティノスはオティノス(Plotinos, 二〇五~二七〇)である。プロティノスは光いらかたちで紹介した人物である。テイラーの古代ギリシャ哲関心に誘われて古代ギリシャの知恵に触れ、アリストテレス、プリーンを学んでいった。それからまもなく、いわゆる古代ギリシャ哲学を産業革命下の英国において翻訳、および論文古代ギリシャ哲学を、ある意味で総括した人物と出会う。その人物がプロティノスはオース・ティフィー、二五年)は、トマス・ティラー(Thomas Taylor, 一七五八~一八三五年)は、トマス・テイラー(Thomas Taylor, 一七五八~一八三五年)は、トマス・ティフィースにある。

ている。そしてこの哲学がプロクロス(Proklos, ca.四一〇~四

ス』の中から、テイラーが英訳する上で重要だと思われる論文をの論文を、弟子のボルピュリオスが集めて整理した『エネアデティノスを受容しているかにある。そのためには、プロティノス

それゆえわれわれの主要な関心は、テイラーがどのようにプロ

八五)によって集大成されることになる。テイラーはプロティノハ五)によって集大成されることになる。テイラーは在世当時、英国におけるロマン派の詩人たちが想が、詩人たちの詩作において有力な源泉のひとつとなり得た、ととらえることができる。したがって英国ロマン派の詩人たちに、少ととらえることができる。したがって英国ロマン派の詩人たちに、少ととらえることができる。したがって英国ロマン派の詩人たちがととらえることができる。したがって英国ロマン派の詩人たちがととらたることができる。したがって英国ロマン派の詩人たちがととらいえよう。

トマス・テイラーにおけるプロティノス受容に関して

でらら。 についての見解が、よく示されているものを考察することも必要る注、その他における記述に留意し、彼自身のプロティノス受容所を考察することが、まず必要である。また、テイラー自身によ取り上げ、両者を比較しつつ、テイラー特有の受容が見られる箇

che)が生じ、それから物体(soma)に至り、その発出の終点に素 初めてプロティノスの英訳を行ったものである。それら両資料を もとに、考察を進めることにする。新プラトン主義は一般に、一 要にとらえる出発点として、善一者を意味する「美について」が そして、この体系の全体をできるだけ容易に、かつ少なからず重 とテイラーは「序文」の全体で語っているように見受けられる。 受けとめうる。精神に目覚めた者なら、学ぶ必要があるものだ、 この思想は古く、オルペウスの神話の時代から語り伝えられたも 読者に思われることを、当時のテイラーも容認している。しかし 論は、ある意味で当初は「極度にばかげているにちがいない」と 材 (hyle) があるという存在論に基づいている。しかしその存在 者 (to hen) から万有が発出し、まず知性 (nous)、次に魂 (psy-とっても最初に書かれたものであり、また、テイラーにとっても、(宀) を取り上げる。プロティノスのこの論文は、プロティノス自身に 存しているのだと考えるべきであろう。 のでもある。いわば、一つの精神世界の実相を語っているものと 以上の要件を満たすものとして、Enn. I, 6, [1]「美について」

テクストの概要と問題点

この概要はプロティノスの原典に基づく。プロティノスのテクストを受容する上での問題点を挙げてみる(3)その概要をまとめ(4)、そこに施された注も考慮して、テイラーがまず、ここでは主としてプロティノスのテキストに基づいて、「5)

(A) 概要

であり、美の影である。 界における美は、知性界における形相の働きを得たものが持つの

は、美しい活動を通してその人が知性界で、美しい本来の魂を自 向かおうとする魂が心得て行うべきことが述べられている。それ すをプロティノスはホメロスの神話をたとえとして、一つの故郷 自己の中にだけ、自己をはるかに超越するものがある。このよう 節では、魂はただ自分の内面にのみ進まねばならないと説かれる。 界で得た感性に関わるものをすべて捨てなければならない。第八 のである。第七節から魂は善一者をめざして上昇する。魂は感性 のはその起源を持つが、それが第一位の美なる善であり、一者な は異なるもの(素材)は魂であり、第一の徳である。存在するも より美しくなる。また真に存在するものとなる。しかし存在者と ける節制、死を恐れない勇気を持ったときに、魂は知性界に上り、 徳を行うことを通してなされると語られている。不浄なものを避 浄化されなければならない。第六節では、不浄な魂の浄化は、 実在するものは美しいことを説く。その美を見失った不浄な魂は、 (eros) による興奮した喜びとともにいる。第五節では、知性界に ない。徳としての正義や勇気を美としてとらえた魂は、美への愛 ない。言いかえれば、人間は本来の魂として自覚しなければなら 性が説かれる。徳を見るためには、心の目が開かれなければなら への逃避ととらえている。第九節では、善にして美である一者へ 第四節では、人間が行う徳の高い行為を美として受け取る重要

> 根源としての善一者に至ることになる。 己自身として見ることであり、その観照が極まるところで、美の

らえ方である。テイラーの素材への関心は、第二節に相当する箇 テイラーのプロティノス受容の上で、問題となるのは素材のと

(B)

テイラーの素材への関心

ティノスは「存在者とは異なる本性(すなわち素材―筆者記)は いて、傍点を施した箇所をテクストにおいて見てみると、 るように思える。なぜなら[A]でのテクストの概要の第六節にお ロティノスの当該のテクストとそのテイラー訳とでは、若干異な と語っているからである。しかしながら素材の受け取り方は、 所における注(3)の記述からうかがわれる。 「素材ほど驚嘆すべき思弁を提供するものはない」。 テイラーはそこで

り、美しい形を奪うものだが、決して悪ではない、というのがテ は悪ではない」と断言している。素材は魂よりも劣悪なものであ てこよう。そこでこの件について、テイラーは別の箇所で「素材 おいても一定していないところがあるという事情がここで関わ 実際に新プラトン主義の素材の扱い方が、プロティノス自身に 英訳テクストにおいて、テイラーはその箇所で、原文に即して英

醜であり、。第一の悪と同じものである」と述べている。しかし

トマス・テイラーにおけるプロティノス受容に関して

訳してはいない。これはなぜだろうか。

上掲の注(3)において、素材はわれわれには知覚すること・新プラトン主義は善悪二元論に陥ってしまうからである。(2)イラーの見解である。なぜなら素材を悪の原理だとするならば、イラーの見解である。なぜなら素材を悪の原理だとするならば、

上掲の注(3)において、素材はわれわれには知覚することも上掲の注(3)において、素材はおれわれたは知覚することを、つかむこともできない、まるで正体不明のものだということを、で流するために用いる言語にも少なからず阻害となる影響を与えで流するために用いる言語にも少なからず阻害となる影響を与えているととらえ得よう。以下、テイラーによる Emn, I, 6. [1] への下文を通して、言語に関する問題を追究しながら、今後われわれが考察していく上で立つ立脚点と、より具体的なパースペクルが考察していく上で立つ立脚点と、より具体的なパースペクれが考察していく上で立つ立脚点と、より具体的なパースペクれが考察していく上で立つ立脚点と、より具体的なパースペクルが考察していく上で立つ立脚点と、より具体的なパースペクルが考察していく上で立つ立脚点と、より具体的なパースペクルが考察していく上で立つ立脚点と、より具体的なパースペクスでは、またいく上で立つ立脚点と、より具体的なパースペクルが表際していく上で立つ立脚点と、より具体的なパースペクルが表別には、1000には

二 テイラーによる

Enn, I, 6, [1] への序文を通して

ようにテイラーは主張する。

アデス』の中から初めて出版したものであり、同時代以降の英国本発表の序において述べたように、この翻訳はテイラーが『エネて」の翻訳に先立ち、六ページ余りにわたる序文を著している。テイラーは今回使用するテキスト、Emn, I, 6, [1]「美につい

に伝搬し、浸透させる必要性を感じていたと思える。当時の英国において、プロティノスの思想を当時の識者、詩人等ロマン派の詩人たちに少なからぬ影響を与えた。テイラー自身、

たらば、真の知識は足場を失い、意味のないものになる、というならば、真の知識は足場を失い、意味のないものになる、というならば、真の知識は足場を失い、意味のないものになる、というならば、真の知識は足場を失い、意味のないものになる。それゆえ対の傾向を帯びたものの見方が主流だったわけである。それゆえ対の傾向を帯びたものの見方が主流だったわけである。それゆえ対の傾向を帯びたものの見方が主流だったわけである。それゆえ対の傾向を帯びたものの見方が主流だったわけである。それゆえ対の傾向を帯びたものの見方が主流だったわけである。それゆえ対の傾向を帯びたものの見方が主流だったわけである。それゆえ対の傾向を帯びたものの見方が主流だったわけである。それゆえがいまり、物質的なものの根源に、精神的なものの作用を認めないつまり、物質的なものの根源に、精神的なものの作用を認めないるのになる、というならば、真の知識は足場を失い、意味のないものになる、というならば、真の知識は足場を失い、意味のないものになる、というならば、真の知識は足場を失い、意味のないものになる、というならば、真の知識は足場を失い、意味のないものになる、というならば、真の知識は足場を失い、意味のないものになる、というならば、真の知識は足場を失い、意味のないものになる、というならば、真の知識は足りない。

論述に用いているが、英国にはなじみの薄いギリシャ語自身に内重の壁があるとテイラーは述べている。ひとつはプロティノスがの性質である。そこには人間相互が健全な交流に至る途上に、二なるのは、われわれが思想を伝えるために用いる言語というものなイラーがプロティノスの思想を社会に広めて行く上で問題と

るこの英訳を読む人にとって、「真理だけが探究する究極の というようにテイラーは見なしている。それゆえ、テイラーによ り優雅でなく、より洗練の程度が低くなるとはいえ」解決しうる 体の難解さである。前者はギリシャ語を英語に翻訳すれば、「よ 在する問題であり、もうひとつは、一般に哲学で使われる言語自

まれる難解さは残ることになるだろう。 そこで、1.の凹の箇所ですでに述べた、素材についての考察

対象だ」ということになる。それでも、プロティノスの思想に含(ピ

むことで、その言説が示すロゴスを正確に捉えることには、少な を落としていることもうかがえよう。すると、ただテクストを読 それぞれ異なった言語が使われるということにも、ある意味で反 注3によれば、素材はある種の無限なので、有限であるわれわれ からぬ困難がともなうことになる。 の動きを通してしか、ロゴスを伝えない人間のある種の宿命が影 映していると考えられよう。そこにはまた、身体における各器官 このことは、この世界において人が住んでいる地域ごとによって、 のである。その阻害は、われわれの言語活動にもおよぶといえる。 るのだといえよう。そして素材は魂の活動を、いわば阻害するも 備えた魂なのだから、身体という物体と関わっている素材と関わ がそれと直接に関わることはできない。むしろ人間は身体を兼ね と関連づけて論じてみよう。上掲のテイラーによる翻訳テクスト

> 「置き換え」(あるいは)「言い換え」という語を用いている。 り詳細に見てみると、この「翻訳」という語として、テイラーは 能だ、とテイラーが見なしていることは先ほど述べた。そこでよ ギリシア語という言語に内在している難解さを取り払うことは可 ア語で書かれた『エネアデス』を英語に翻訳することによって、

搬することが可能となるであろう。しかし、人間の言語そのもの 箇所を明白にした旨をテイラーは述べている。そのことによって、 ティノス特有の縮約された原テクストの文体を広げて、不明瞭な 英語というかたちで、より容易にプロティノスの思想を社会に伝

テクストの注1には、その置き換えによって、ある意味でプロ

は、素材とつねに関わる物体だということである。それゆえ、 るものであれ、身体器官の動きによってもたらされる。その身体 ®で触れたことと深く関わる。つまり、われわれの言語はいかな の違いよりも根源的な桎梏がある。そうしたものについては1.

した意味で、言語によっていわゆる真理を伝達する上では、言語 には、ある意味でロゴスの交流を不確実にするものがある。そう

で、一定の限界があるととらえる必要があるだろう。それゆえテ う。

もしそうだとすると、

われわれの言語活動も正確さという点 阻害もなく受け取ることは不可能になるということになるであろ イラーは、言語の違いということも含めて、言語そのものによっ

が語るオリジナルなものを、身体を通して語られた言葉で何らの

事態を整理しよう。当時の英国において、なじみの薄いギリシ てはいわゆる真理を伝達すること自体が少なからず困難であるこ

れることになるのだろうか。節を改めて検討してみたい。に紹介しなければならないことになる。これは一見無理な要請ということになろう。この言語による伝達の限界を見据えながらも、いうことになろう。この言語による伝達の限界を見据えながらも、いうことになる方。この言語による伝達の限界を見据えながらも、とも自覚することが必要になる。そのうえで、プロティノス、おとも自覚することが必要になる。そのうえで、プロティノス、お

三 真にオリジナルなものとは何か

ナルなもの」だととらえることはできないであろうか。

われわれはさまざまなものが表現されている世界にいる。個々われわれはさまざまなものが表現されているものには、それぞれのものを作った者がいる。の表現されているものには、それぞれからできる方に、変わされるといえよう。一連の著名な作曲家が、いわゆる音楽史に名されるといえよう。一連の著名な作曲家が、いわゆる音楽史に名を連ねている。彼らの作品はそれぞれオリジナルなもの」とすことができよう。そうしたものを人は「オリジナルなもの」とすことができよう。一連の著名な作曲家が、いわゆる音楽史に名されるといえよう。しかし古典と称されることからも了解できるように、変わらず存在する楽譜とそれを演奏する楽器の進展との間に、実演するうえで齟齬をきたすようになるという事態も考えられることである。それゆえ楽譜となれている世界にいる。個々われる楽器との調和が保てなくなることにもなりうる。

バッハの著名なオルガン曲をピアノで演奏する場合などにも、

よう。そこでの演奏こそ、バッハによる楽譜以上に真に「オリジまさに「オリジナルなもの」への遡及がなければ不可能だといえいく。そのピアノの演奏を披露するための編曲というに業には、いく。そのピアノの演奏を披露するための編曲というに業には、いく。そのピアノの演奏を披露するための編曲というに業には、その作業、すなわちバッハがその曲を作る根源にまで遡って編曲をする業、すなわちバッハがその曲を作る根源にまで遡って編曲をするよう。そこでの演奏こそ、バッハによる「オリジナルなもの」をよう。そこでの演奏こそ、バッハによる楽譜以上に真に「オリジナルなもの」をよう。そこでの演奏こそ、バッハによる楽譜以上に真に「オリジナルなもの」をよう。そこでの演奏こそ、バッハによる楽譜以上に真に「オリジまうに、

上述したこととほぼパラレルにテイラーのいわゆる新プラトン上述したこととほぼパラレルにティラーのいわゆる新プラトン上述したこととはぼパラレルにティラーのいわゆる新プラトン上述したこととはほパラレルにティーのにあり、で遡及することができたときであろう。まさにその他のギリシンス、およびその他の著者がそこから自身の思想を語る根源にまった。これは上述の古典音楽の例に当てはめれば、「編曲」というる。これは上述の古典音楽の例に当てはめれば、「編曲」というる。これは上述の古典音楽の例に当てはめれば、「編曲」というる。これは上述の古典音楽の例に当てはめれば、「編曲」というる。これは上述の古典音楽の例に当てはめれば、「編曲」というる。これは上述の古典音楽の例に当てはめれば、「編曲」というる。これは上述の古典音楽の例に当てはめれば、「編曲」というる。これは上述の古典音楽の例に当てはめれば、いわばティラーのいわゆる新プラトンと表である。その伝承をテクストにしたのがプロティノスなのであり、やウス、ピュタゴラスを通じて伝承されたものなのにあり、対したいというというによりによっている。

曲」のようなかたちで、テイラーは英語で書き記したのだと受け見渡した上で、いわゆる先の例で挙げたような音楽でいう「編りいえないだろうか。すなわち、プロティノスがそこからギリシはいえないだろうか。すなわち、プロティノスがそこからギリシロゴスをプロティノスとほぼ同じ場所に立って述べているのだというのを敷衍して述べれば、テイラーの作業になる。さらに以上のこバラフレーズするのが、テイラーの作業になる。さらに以上のこ

精通しているように見受けられる。このことは彼の文献表の膨大になる。テイラーはオルベウスの神話に端を発する思想に、深くあるならば、テイラーは「オリジナルなもの」に触れていることあるならば、テイラーは「オリジナルなもの」に触れていることはできないのだろうか、ということである。もしそうで曲」のようなかたちで、テイラーは英語で書き記したのだと受け曲」のようなかたちで、テイラーは英語で書き記したのだと受け

れない。その「響き」の根源に、喜怒哀楽の情を超えた刹那に、再び、われわれにとって音楽的にとらえうるものがあるのかもしを示すのだととらえることができるだろうからである。そこにはを示すのだととらえることができるだろうからである。そこにはない。そのは言語で表現される以前の、純粋なロゴスだといそこにあるのは言語で表現される以前の、純粋なロゴスだとい

れが住んでいる世界を支えながら、より豊かに存在している世界

影響史という観点からも、少なからぬ重要性を持つものだと考え頭い知ることができるとはいえないだろうか。そのような根源への探究は、テイラーによる「言いかえ」や彼自身のメッセージを、の探究は、テイラーによる「言いかえ」や彼自身のメッセージを、がったれるように思える。そしてこの作業は、新プラトン主義を学ぶ意義があるといえるのだろうし、そこに英新プラトン主義を学ぶ意義があるといえるのだろうし、そこに英

より純粋な響きを聞くことによって、われわれが目覚めることにわれわれはある意味で全存在をかけて耳を澄ますのである。その

おわりに おわりに おわりに おわりに まって、われわれてまってしまっているこの現世という、いわば「経験」の世界に生きている個々の人間の魂を、より清澄な精神世界へと啓蒙すに生きている個々の人間の魂を、より清澄な精神世界へと啓蒙すに生きている個々の人間の魂を、より清澄な精神世界へと啓蒙すに生きている個々の人間の魂を、より清澄な精神世界へと啓蒙すに生きている個々の人間の魂を、より清澄な精神世界へと啓蒙すに生きている個々の人間の魂を、より清澄な精神世界へと啓蒙すに生きている個々の人間の魂を、より清澄な精神世界へと啓蒙すたまってしまっているのだと受け取れよう。それに共鳴することから、われわれの作業が始まるのだと思える。そして、われわたいら、その根源的な「響き」に耳を澄まし、それに共鳴することから、われわれの作業が始まるのだと思える。そして、われわれの作業が始まるのだと思える。そして、われわれの作業が始まるのだと思える。

ものだと見ることができるとすれば、プロティノスとテイラーにでテイラーの諸業績を「オリジナルなもの」に触れた、独創的なさを考慮すれば、否定はされないであろう。上述したような仕方

共通する根源への探究が求められることになる。では根源にある

- われの課題になるのだととらえることができるだろう。へと目覚め、その究極をめざすまなざしを育てていくことがわれ
- (中央公論社、一九八六年)第一巻、二七四頁を参照。(1) 田中美知太郎、水地宗明、田之頭安彦 訳『ブロティノス全集』
- (24) "Bibliography" in Cathleen Raine and George Mills Harper (ed). *Thomas Taylor The Platonist*, Princeton: Princeton University Press, 1969. p.523.
- (3) 底本は、Paul Henry. Hans-Rudolfschwyzer (ed.) *PLONTINI Opera*. Tomys I, *Enneades* I-III, Clarendon: Oxford University Press, 1977. pp. 92~104. およびテイラーの英訳は op. cit., "Concerning the Beautiful or, A Paraphrase Translation from the Greek of Plotinus, *Ennnead* I, Book VI." pp. 135~160.
- (4) Raine & Harper (ed), op. cit., p. 140.
- (5) 当論文の用いた翻訳は、ラテン語訳では Marsillo Ficino (tr.), F. Creuzer & G. H. Moser (ed), Plotini Enneades, Paris: Instituti Francici Typographis, 1896. を用いた。R. Harder, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1956~1971. および臣. Bréhier, Paris: Sociétéd' Édition Les Belles Lettres, 1954~1960. も随所で参考にした。邦訳は田中美知太郎、水地宗明、田之頭安彦訳でプ
- (Ф) Raine & Harper (ed). op. cit, p.146.

ロティノス全集』(中央公論社、一九六七~一九八七年)を使用し

- (7) 6: $21 \sim 22.... < g$ d\$ <es*eqa u*tri s+o a\$irvq*om, s*o d\$ a\$ts+o ja+i-pq&xsom jaj*om, ...
- (∞) Raine & Harper (ed.), op. cit., P.153. \cdots and turpitude is of

- a different nature, and participates more of non-entity than heinor
- (Φ) Plotinus. Taylor. Thomas (trs.), Collected Writings. of Plotinus Frome: The Prometheus Trust, 1994. p. 59.
- 参照。 (10)『北陸宗教文化』第一二号(二〇〇〇)所収の拙論 pp. 125~127
- Raine & Harper, op. cit., pp, 147~148.

11

- (12)『北陸宗教文化』第一四号(二〇〇二)所収の拙論 pp. 45~64 参
- (13) 同拙論参照。
- (4) Raine & Harper op cit., P.5
- (5) ibid. p. 138.
- (6) ibid. p. 137.
- (7) ibid. p. 137.
- (18) ibid. p. 137.
- (9) ibid. p. 147.
- 四頁参照。 四頁参照。 四頁参照。 四頁参照。 四中、前掲書八によって感性界が保たれている原理のことである。 つまりそれが感性界に働きかけている「形成作用」のことである。 つまりそれ(20) ここで言う「ロゴス」とは、プロティノスの言説において、知性
- 件についての解明は、今後の課題とする。 ン語訳をある意味で下敷きにしているようすがうかがわれる。このン語訳をある意味で下敷きにしているようすがうかがわれる。この件業を行うために、テイラーはフィチーノによるラテ
- (2) ibid. p. 147.
- ニ」〈全四回〉於石川県立音楽堂交流ホール(二○○五年七月一九))以下の言説は、金澤攝によるピアノ演奏会「一九世紀のブゾー

ションに基づく。また、金澤攝『失われた音楽―秘曲の封印を解 トの解説文、および本人による筆者へのパーソナル・インフォメー 日~一〇月一三日)において金澤自身が記載した、紹介パンフレッ

く』龜鳴屋、二〇〇五年を参照。 ibid. pp. 523~533.

社、一九九四年、所収、一七五~一八五頁を参照) 阿波昌「空思想と音楽神秘主義」(『大乗仏教思想論攷』大東出版

(みやけ・ひろし、哲学、金沢大学非常勤講師)